みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Investigating Ethnicity : My Studies and Views of Ethnic Groups in China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ⊠, 孝通, 塚田, 誠之 [訳] メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004148

エスニシティの探究
——中国の民族に関する私の研究と見解——

費　孝　通*
訳〈塚　田　誠　之**〉

Investigating Ethnicity: My Studies and Views of Ethnic Groups in China

Xiao-Tong Fei

For sixty years, the author has been engaged in the study of ethnic groups in China. This paper represents an attempt to provide an overall view of his personal experiences in this field which in turn sheds light on the ways in which he has viewed ethnic identity. Prior to 1949, after having been trained in the subjects of anthropology and sociology, the author started to conduct fieldwork in both Han and non-Han communities. After 1949, for the purpose of creating equality among all nationalities in China, the newly established People's Republic administered a major research program to identify ethnic groups within its territorial sovereignty. As a member of this program, the author was involved in extensive nationality surveys. Through these surveys, he came to realize that ethnic groups were shaped in the communal lives of their members and transformative in time. This observation led the author to

* 北京大学社会人類学研究所
** 国立民族学博物館第2研究部。本稿は，費孝通教授の中国語による論文を邦訳したものである。それは1996年10月11日・12日に国立民族学博物館で開催された国際研究集会「中華民族多元一体論と中国における民族間関係」における報告「簡述我的民族研究経歴和思考」をもとに，加筆をお願いしたものである。訳出に当って原文の“　”は「　」と，《　》は『　』とした。また，分かり難い表現については，原文を生かした上で，初出時に［　］を付して訳者が補足をした。なお北京大学社会学人類学研究所馬戎教授および大阪大学大学院（言語文化研究科）木村自氏の協力を得たが，訳出に関するすべての責任は訳者にある。

Key Words: ethnic groups (nation), system of integrated ethnic diversities, history, shared psychological quality (ethnos), interrelationships among ethnic groups
キーワード：民族，多元一体格局，歴史，共同心理素質，民族間関係

emphasize the significance of the social historical perspective in ethnological studies.

Even though the "Anti-Rightist Movement" and the "Cultural Revolution" deprived him of 23 years of academic life, the lessons of ethnic identification which he gained in the early fifties remained in the author's mind. In 1979, he re-started work among minority nationalities. Personal involvement in various research projects and in the policy-making process has made it possible to put forward a new argument. In 1989, summarizing his thoughts, the author put forword argument that China is an integrated nation with cultural diversity. In doing so, he had two criticisms in mind. On the one hand, he criticizes the idea that one ethnic entity should be ruled by one independent state which has legitimated various violent campaigns of ethnic separation in Europe. However, the author's own studies indicate that different ethnic groups have lived together for centuries within China. Therefore, the Eurocentric definition of nation-state is not applicable in China. On the other hand, historical studies of interrelationships among ethnic groups in China have demonstrated that the Chinese nation was shaped through a two-way process. From the bottom-up perspective, the history of the Chinese nation is one through which diverse ethnic cultures and social solidarities became integrated into a higher level order. From the top-down perspective, the higher level order has never excluded lower level ethnic cultural systems. Such a two-way historical perspective offers a critique of those who attempt to draw a clear-cut demarcation line between the Chinese nation and "other cultures" within it.

一

1930年に私は燕京大学へ移り，呉文藻先生に師事して社会学を学んだ。呉文藻先生の指導と影響の下で私は，中国社会を科学的に理解しようとするならば，欧米人類学のフィールド・ワークの方法を取り入れて，現実に重点を置いた分析をすることが，より着実に実行することのできる方法であると認識するに至った。このため，1933年に清華大学の研究院に進み，シロコゴロフ先生に師事して人類学を学ぶことになった。清華大学での二年間は，主に形質人類学を学んだ。1936年の秋から，ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスでマリノフスキー先生に師事して社会人類学を学び，1938年の抗日戦争期に帰国した。雲南に到着するとすぐに国内で農村調査を開始し，マリノフスキー先生の機能主義的観点とフィールド・ワークの方法に基づき，呉文藻先生

の提唱された「コミュニティ研究」を行った。この研究は1949年に新中国が成立するまで一貫して続いた。それより前の1935年，清華大学の研究院を修了した後，少数民族地域で一年間の実習をするようにというシロコゴロフ先生のアドバイスを受けて，広西の大瑤山に行き，瑤族の体格と社会組織に関する実地調査を行った。このときの実習が私の民族研究の最初の試みであると言うことができる。1936年夏に帰郷し休養したが，その機会を利用して，故郷の江蘇省呉江県の「江村」で，二個月弱の期間，農村でのフィールド・ワークを行った。

ここで少し説明を加えなければならないかもしれないが，呉文藻先生の提唱された「コミュニティ研究」は，学問分野としては実際には社会学と人類学を結び付けたものである。コミュニティとは，人々がある一定の地域で共同生活を営むような集団を指している。コミュニティは人口が比較的少なく，経済が比較的単純で，文化水準がそれほど高くない原始の族群［民族集団］でも構わないし，人口が比較的多く，経済や文化が比較的発達している農村や，郷鎮，都市などでも構わない。こうした視点によるならば，私が1935年広西で行った瑤族調査，1936年の郷里の江村での農村調査，さらにその後の1939年に始めた雲南奥地での農村調査もコミュニティ研究に含めることができるであろう。こうした異なったコミュニティでの研究の対象とそこで用いる研究方法は同じものである。コミュニティ研究は私の生涯の学問研究を貫いてきた主軸であると言えるであろう。コミュニティ研究という名称とそれが用いるところの研究方法・視点は，中国の伝統的な学問分野の分類とは完全には一致しないし，学界の受け入れるところとなり得るかどうかは議論されるべきところである。こうした名称についての論争を避けるために，ここで私は研究対象をもって「コミュニティ研究」を区別し，二つの面に分類する。一つが民族研究で，もう一つが農村研究，およびのちの城郷［都市と農村］研究である。この論文では，私が従事してきた民族研究の方面に限って概述することにしたい。

二

私の学問の経歴から述べるならば，時期によって重点を置く分野が異なっていた。あるときは民族研究が中心であったし，またあるときは城郷研究が中心であった。個人の研究対象の選択という点から見るならば，それが個人的な関心によって決定されるのみならず，個人の置かれた客観的条件も非常に重要である。私自身について言うならば，1936年に私がロンドン・スクール・オブ・エコノミックスで研究していたと

き，指導教官から江村で得た調査データをもとに博士論文を書くように言われたが，その論文が後に出版された *Peasant Life in China* [FEI 1939] である。その後の雲南省での私の研究は農村研究に偏ったものであり，それは抗日戦争の終結まで続いた。1949年に新中国が成立し，私の研究の重点は民族研究へと移った。今，回想するに，この研究対象の移行は主にその当時の客観的情勢の変化によるものであった。以下に，このことについてもう少し語ることを許されたい。

新中国の成立は，わが国の歴史上空前の大事であり，全国の社会構造に非常に大きな変化をもたらした。そのうちの一つが民族間関係の大きな転換，すなわち不平等な関係から平等な関係への変化である。中国は多民族国家であり，民族間の関係は非常に複雑であるが，数千年もの間基本的に変わらなかったものは，民族間の不平等な関係である。どの時代においても，いずれかの民族が他の民族を圧倒し，いずれかの民族が他の民族に圧倒されていた。こうした歴史のなかで中国では政治上幾度も王朝が変わり，支配的な地位を占める民族が幾度も替わったが，民族が民族を抑圧するという関係の図式は決して変わることがなかった。今世紀の初頭に至って封建王朝が倒れ，民国時代に入って初めて，孫中山先生を中心として五族共和の主張が推進された。その後さらにほぼ半世紀が経過し，中華人民共和国が成立して以後，初めて諸民族が一律に平等であるという事実が出現し，同時に国家の憲法においても規定がなされた。このときからわが国の民族間相互の関係において新たな民族平等の時代が実現し，今まですでに半世紀近くが経っている。ここで，わが中国の民族間関係の根本的な変化を思い起こし，現代世界における民族紛争がいまだに終息していない形勢を考え合わせるならば，民族の平等が人類の共通の運命にかかわる根本的な重大事であることを認めないわけにはいかない。平和で理想的な世界には，民族の平等は決して欠くことのできない条件なのである。この条件はわが中国で最初に実現された。このことは人類史上特筆されるべきである。

民族の平等を実現するために，私たちは新たな制度を作る必要があった。政治体制の上では，各民族の代表者が参加する最高権力機関，すなわち人民代表大会の創設が必要であった。ところが，新中国の建国直後の時期には，中国に一体いくつの民族がいるのか，それらはいかなる名称なのか，そして人口はいかほどなのかということが私たちにははっきりと分かってはいなかった。

諸民族に関する基本的な状況を明らかにするため，成立して間もない中央人民政府は，1950年から1952年にかけて「中央訪問団」を派遣し，それぞれの大行政区へ分かれて各地の少数民族（漢族以外の民族はすべて人口が比較的少ないので，普通，少数

民族と呼ばれる）をあまねく訪問した。中央訪問団の任務は，民族平等という基本政策を宣伝することのほかに，自ら各地の少数民族を訪れ，彼らの民族名称（自称と他称を含む）・人口・言語・歴史の概要，および彼らの文化的特徴（風俗習慣を含む）を明らかにすることであった。私は人類学を学んでいたので，政府は私を中央訪問団に参加させた。これは私にとっては千載一遇の機会で，私はまず第一に，政治における民族平等の基本政策を積極的に支持するために全力を尽くそうと望んだ。同時に私は，直接訪問するという方法で各民族の状況を理解することが，すなわち私がかねてより提唱していたコミュニティ研究であると思い，この任務を積極的に引き受けた。1951年と1952年に私は西南と中南の訪問団に相い継いで参加し，貴州省と広西省の実地訪問の指導に責任を負った。この二年間こそが，私の民族研究の真正の開始と言える。

訪問団の仕事において，山嶺を越え，森林渓谷に入り，貴州省と広西省の各地に分布している少数民族の村落へ入り，人々と親しく交歓し，対話をする機会があった。多くの少数民族と直接触れ合うなかで，民族というものが客観的で普遍的に存在する「人々の共同体」であり，代々受け継がれ，心底からのアイデンティティを持つ人々の集団であるということを，私は初めて理解した。同一民族の人々は，禍福や利害を共にする，強烈な一体感を持っている。彼らは共通の言語を持ち常に一緒に生活しているので，互いに守り合い助け合い，苦難を共にするという非常に密接な社会関係のネットワークを形成する。要するに，民族とは中身のない空虚な概念なのではなく，実在の社会実体であるということを私は理解するに至ったのである。同一の民族に属する人々のアイデンティティと一体感は，人々の意識にこの社会実体が反映したもの，すなわち普通私たちが言うところの民族意識である。民族意識は具体的には自己の所属する民族に対して持つ名称（自称）のみならず，他の民族がしばしば用いる異なった名称（他称）にも表現されている。一般的に言うならば，私たちが触れ合うところの少数民族の人々は皆，自分たちがその名称の民族に属しているということを知っている。中国にいかなる民族がいるのかという問題に答えるためには，まずは各地の少数民族が自ら申告している民族名称を入手するべきであると認識した。

1953年の第一回全国人口センサスにおいて，自己申告により登録された民族名称は全国あわせて400余りにも達した。この民族名称を自己申告したリストを分析すると，その中に多くの問題があることが分かった。少数民族であると自己申告したもののいくつかは実際には漢族であるが，様々な理由から一つの民族であると自ら認識していたり，あるいは他者からそのように認識されており，しかも特定の名称すら持ってい

た。例えば，広西の「六甲人」，湖南省の「哇郷人」などである。また，あるものは他のある少数民族の一部であるが，様々な理由によりいくつかの民族に分けられ，しかも異なった民族名称を持っていた。例えば，雲南省の「阿細」・「撒尼」・「阿哲」・「普拉」などはすべて彝族のサブ・グループであった。このため，自己申告による民族名称に直接的に基づいて，彼らが一つの民族であるかどうかを決定することはできなかった。これらの自己申告による民族名称を逐一審査し弁別することが必要であった。これは非常に複雑な仕事であり，私たちはこの仕事を民族識別工作と称した。それは1953年に始まり，三十年ほどかかって，1982年に一段落を告げた。識別をした後にさらに現地の民族の人々と協議して同意を得て，初めて中央による審査決定を経て公布することができた。1954年には38の少数民族が，1965年には15の少数民族が，1982年にはさらに2つの少数民族がそれぞれ認められ，今日までに55の少数民族が認められている。漢族を加えると，中国というこの多民族国家は合わせて56の民族を有している。これらの民族の正式名称は，名はその主に従うという原則に沿って，さらに協議を通して初めて正式に認められたのである。民族識別工作はまだ終了したわけではない。というのも，ごく少数のまだ識別に結論が出されていない人々がいるからで，この判定し難い問題はさらに研究を深めてから初めて決定することができる。

三

民族識別工作がどのように関わったら民族を認定することができるのかということは，民族理論の問題である。すでに述べたように，私は，民族地区において少数民族と実際に接触するうちに民族とは何かを理解した。すなわち民族とは，人々のある種の必要性から生じた何の根拠もない虚構の概念ではなく，客観的に存在するものである。それは多くの人々が子々孫々集団で生活を営むうちに形成されてきたものであり，人々の社会生活において重大な作用を果たす社会実体である。民族の形成に対して，その具有するところの特徴で説明をすることは民族理論の範囲に属する。それゆえ民族理論は民族識別の根拠となり基準となる。解放初期に私たちが参考にすることができた民族理論は当時ソ連から移入されたものであった。当時ソ連で広く行われていた民族の定義は，簡単に述べると次のものである。「歴史的に形成されてきたところの，共通の言語・共通の地域・共通の経済生活を持ち，共通の文化において表現される共通の心理素質［状態］を持った，人々の堅固な共同体である。」この定義は，ヨーロッパの資本主義が発展してきた時期に形成された民族を基準にして結論が出されたも

のである。ここで提出されている「歴史的に形成された」という限定的な表現は，とりもなおさず定義の中で提示された四つの特徴が歴史上の特定の時期の民族にのみ適用されるものであることを示している。他方，わが国の少数民族は，解放初期には大部分がまだ資本主義以前の段階にあり，よってこの定義の中で提示されている四つの特徴は，私たちの民族識別工作においてはただ参考としての作用を果たすだけで，そのまま用いてはならないことは明白であった。しかし同時に私たちは次のことをも認めねばならない。すなわち，ソ連から移入した理論が，かつて確かに私たちを導いたのであり，私たちはこの定義に提示されている共通の言語・共通の地域・共通の経済生活・共通の文化に現れる心理素質の面から，中国のそれぞれの少数民族の実際の状況を観察した。それは私たちの民族理論に関する一系列の思考を啓発し，さらにそれによって中国の民族の特色を理解することになったのである。

まず「共通の言語」という特徴について述べたい。すでに述べたように，私たちが観察し得た事実は，一緒に生活している少数民族は同一の言語を使って対話をしており，共通の言語がなかったならば日常の共同生活が営めるはずがないということであった。同時に，彼らの言語と他の民族の言語が同一でない場合，たとえば漢人と他の異なる民族の人との間ではそれぞれの言語を用いて直接に意思疎通をすることはできない，ということをも理解した。このことは，それぞれの民族にはそれぞれの言語があり，異なる民族との間には共通の言語がない，よって相互理解を得るためには翻訳を経ることが必要であるということを物語っている。このことは明白であり容易に理解できた。しかしながら，自ら同一の民族であると認識している人でも，異なった地域から来ているならば，彼らの間で必ずしも直接に通話をすることができるとは限らないこと，すなわち彼らの間での言語にも相違があるということをも私たちは理解したのである。このことは私たち漢族の間でもしばしば見受けられる状況である。例えば，私たち蘇州人が初めて福建人，あるいは広東人に会うと，言葉が通じない。これは各地の方言が異なっているからである。方言は学び始めるとそれほど困難ではない。というのも，方言の差異は各地の住民の発音が異なっているだけで，言語の文法構造や使用する文字や語句は基本的に同じだからである。ここで「共通の言語」がどの程度まで共通なのかという問題が生じる。この問題は言語学の専門知識と深くかかわっている。言語学では，言語の差異の程度に応じて語系・語族・語支などに分けられる。同一の語支の中でも地域間の差異，つまり方言によってさらに細かく分けられる。言語学の専門知識を持ち合わせていない人は，単に聴覚によるだけではどの程度異なっていれば異なった語系・語族・語支であるのか，あるいは方言であるのかということ

を容易に区別することができない。民族識別工作を進めていたとき，この方面の問題に関しては言語学者に頼るほかはなかった。幸いなことに私たちの民族研究は早くから少数民族の言語調査に注目しており，よって私たちが民族識別工作を行ったときには，すでに十分な少数民族言語の資料があって，私たちに参考となった。

言語の角度から上述の民族名称の自己申告リストを調べてみると，リストに二つの状況が見られることが分かった。一つが，異なる民族であると報告されたものの中の言語の多くが同一のもの，もしくは非常に近いものであったということ，もう一つが，同一の民族と申告されたものの中に異なる言語が含まれていたということである。前者には，例えば広西の「布壮」・「布越」・「布雅依」・「布衣」・「布土」・「布雄」・「布儂」など侗傣語系の言語を話す人々が挙げられる。これらの言語を話す人々が相互に対話をしたところ，彼らは自らの話す言語が同一の母語から生じていることに同意し，こうして皆が進んで合わさって，壮族という民族に入ることを願うようになった。後者については，例えば私が1930年代に調査をした広西の大瑤山の瑤族が挙げられる。大瑤山には三つの異なった言語がある。すなわち苗瑤語族瑤語支の勉語（盤瑤），苗瑤語族苗語支の布努語（花藍瑤），壮侗語系侗水語支の拉加語（茶山瑤）である。これらの異なる言語を話す人々はそれぞれの自称を持つものの，すべて瑤族に属していると自ら認識していた。私たちは自由意思の原則に基づいて彼らがすべて瑤族の一部であると認定した。瑤族には他の地域にも多くの自称の異なる集団があるが，皆がおしなべて瑤族と称していたのである。

ここで説明しておかなければならないことは，私たちは上述の「定義」が提示している特徴のそれぞれを独立に用いて対処するのではなく，必ず他の特徴と結び付けなければならないこと，特にこれらの合わさって一つになった民族に関しては自己申告の際の各単位の間の歴史的な淵源関係を考慮に入れねばならないと考えたことである。というのも，中国史の一つの特徴は，長期にわたって異なる民族が絶えず流動するうちに，あるものは分散し，あるものは孤立し，またあるものは相互に接触する過程において融合していったからである。このように反覆的に分散し融合する過程において，広大な地域に諸民族が交錯して分布するという現在の格局［碁盤の目の上に置かれた碁石のような，可変的な民族集団間の構造的関係と分布態勢］が形成されたのである。私たちが民族識別を行う際には，歴史的な観点と自由意思の原則とを採用することが必須である。同時にこの複雑な状況を認め，決して行政的な手段を用いて結論を下してはならない。従って，ただちに解決することができないような事例は，むしろ問題をそのままにして結論を急がず，主観的な判断を加えるべきではないのであ

る。

さて「共通の地域」という特徴について言うと，私たちは民族識別工作の実践をする中で「民族聚居区」という概念を提起して補充と修正を加えるようにした。同一の民族に属する人は同一の地区に住む傾向があることは認めるが，しかし「同一の地区」と「共通の地区」とを同一視するべきではない。というのも，同一の地区に異なる民族が共に聚居することができるからである。こうした現象は中国ではとくに突出しており，私たちはそれを「大雑居，小聚居」と称している。1982年の人口センサスのデータによると，全国の民族自治地方に聚居している少数民族の人口は，少数民族の総人口の74.5％を占めるのみであり，おおよそ4分の1の少数民族の人口が全国各地に雑居あるいは散居している。要するに，中国の諸民族の居住形態は，決して区画が整然としており境界が明確なものではなく，相互に入り混じって，交錯雑居しているものなのである。これは，中国の諸民族間の長期にわたる交錯的な流動と相互交流の結果である。とはいえ，民族の人口分布の上から見ると，同一民族が聚居する傾向はやはり非常に顕著で，その大小にかかわらず，同一の民族が聚居する地区は各地に分散しており，甚だしい場合には居住地が全く連接していないことさえある。さらに，ある民族の聚居地区においても異る民族が聚居していたり，あるいは散居している場合がある。

私たちは，中国のこの特徴に基づいて，「民族聚居区」という概念を提起した。それは理論上，現実と結び付く重要な意義を持つだけでなく，国家がどのように民族間関係を処理するのかという面においても民族平等の原則を具体的に表現しているのである。私は欧米の民族理論の中で「共通の地域」を民族の特徴となすことと，政治的観念において国家と領土とを密接に結び付けることとは分離することのできないものであると考えている。まさにこの概念によって，民族を国家と結び付けて民族［国民］国家とし，その上国家の領土の完備を求めようとした。このことが目下欧米で民族紛争が連綿として絶えず，民族をめぐる戦争がいまだに息むことのない原因なのではないだろうか。欧米の民族理論と民族間関係を照らし合わせてみると，「民族聚居区」の概念をもって民族の定義の中の「共通の地域」に代えて特徴とする認識は，熟考するに値するであろう。

私がここで特に提起したいことは，こうした新しい概念が私たちの中華人民共和国憲法にすでに書き入れられており，その第1章総綱・第4条の中に「少数民族が聚居する地方では区域自治を行う」と規定されていることである。この規定にしたがって中国の少数民族はすべて自治の権利を享受しており，同時に，設立された自治地方の

中では他の民族とともに雑居することを排斥しない。さらに，もし一つの区域に人口が相い匹敵するいくつかの少数民族が共同で聚居しているならば，多民族連合の自治地方を設立することができるし，同一の少数民族が相い連接していない自治地方をいくつも持つこともできるのである。

次に，先に引用した旧ソ連で流行した民族の定義のうちの第三の特徴「共通の経済生活」についていささか意見を述べたい。私たちは中国の実際の状況と結び付けて検討した結果，この特徴がわが国の国情にはそぐわないものであるとみなした。すでに述べた旧ソ連で流行した民族の定義はヨーロッパの資本主義が発展してきた時期の状況を総括したものである。資本主義が発展してきた時期にヨーロッパでは確かに共通の民族［国民］統一市場が作られる趨勢にあったが，実際に形成されたのは国境を越える植民地主義的な市場であった。仮にこの植民地を内部に含む民族国家市場が現代民族の特徴であるかどうかを論じないにしても，現代の欧米の民族について言えば，一つの民族に属する人々の経済生活が「共通」であると言えるかどうかも問題であろう。この「共通の経済生活」は明らかに多くの共通ではない層次［レベル］，あるいは階級を含んでいるし，甚だしい場合には二つの民族の矛盾が共存していると指摘する人もいる。いずれにせよ，私たちは「共通の経済生活」をそのまま援用して中国の少数民族の特徴とすることはできないのである。一般的に言うならば，解放の時点で中国の少数民族の多くが資本主義以前の段階の小農耕作と草原での放牧という経済状態に置かれていた。私たちはせいぜい解放前の少数民族がおおよそ同一の，あるいは似通った（共通のではない）経済生活を営んでいたと言えるだけである。

中国の少数民族の経済生活の面において注意すべきことは，諸民族の間，とくに漢族との間の密接な関係である。漢族は歴史的に，国内の他の民族と比較すると，経済的・文化的に優勢であった。このため，漢族はすでに長期にわたって他の民族が聚居する区域に深く入り込み，諸民族の間の橋渡しをする経済的な経路を作り上げていた。漢族の聚居する商業拠点はほとんどすべての少数民族の聚居区域に散在し，全国の至るところに及んでおり，巨大な経済流通ネットワークを構成し，漢族が諸民族との間で物質や精神文化を吸収し伝播するという作用を果たしていた。そして幾多の歳月を経て徐々に諸民族を高層次の共同体へと束ねたが，これこそが次章で提起することになる中華民族である。

最後に「共通の文化特徴に現れる共通の心理素質」に関して一言述べたい。この特徴は，旧ソ連で流行した民族の定義の中で最も重要な特徴であるかもしれない。しかし，それはまさしく私たちが最も捉えにくい特徴なのであった。私自身について言う

と，いまだにそれを十分に理解しているとは言えない。ある時期，私たちはこの特徴を少数民族が持つところの特殊な風俗習慣であると大まかに見なしており，しかも常に少数民族の側から超俗的で，犯してはならない，神聖な性質をもつ特徴であると見なされていた。こうした理解はもちろん容易に観察されるが，それでも上述の定義の中の意義とはいくぶん相違があるようである。

この特徴の意義を捉えようとするとき，私は心理素質というこの数文字に特に注意を払い，人々の心理的な面から民族意識がどのように形成されてきたかを考えた。こうした思考方法は，私を理論面での更なる探求へと導いた。探求の過程で，私は以前に社会学で学んだ in-group もしくは we-group という言葉に思い当たった。in-group 或いは we-group とは私たちが周囲で触れ合う様々な人を二種類に分類したもので，一つは自家人［内輪の人］，もう一つは陌生人［外部の人］である。簡単に言うと，他者と自己との区別という点をもって異なる集団に類別し，なおかつ異なる感情と態度という点からもこの二つの集団を扱うことである。およそ自己と同じ集団に属する者がすなわち自家人であり，親密な関係を保ち，苦楽を共にする。自家人としてのアイデンティティが共通の運命感と共通の名誉と恥辱の感情を生み出す。in-group 或いは we-group とは「アイデンティティ」が生み出したところのものではないだろうか。そして民族とはそもそも一種の in-group もしくは we-group なのではないだろうか。こうした思考方法から私は，民族という集団の心理素質を探り出した。すなわち，言うところの民族心理素質とは実は民族的アイデンティティにほかならないことが分かったのである。民族的アイデンティティは決して空虚なものなのではなく，私たちそれぞれが自己を省みる行為を通して民族的アイデンティティとは何かを会得することのできるものなのである。現在ではすべての人が自己の所属する民族を持っており，すべての人が民族意識を持っている。

以上が民族の実際の状況と結び付けた民族理論に対する私の見解である。民族の実際の状況は地域や時代によって変化するので，私たちも実際の変化に即して民族に対する認識を不断に発展させねばならない。中国の現実は私たちに民族理論を学ぶための絶好の機会を与えてくれるのである。

四

先に述べた数年間の民族研究の実践において，私はわが国の民族の特徴に対して一定の知見を得たが，同時に民族とは人々が共同で生活をする経歴の中から形成される

ものにほかならないということをも理解した。つまり，民族は歴史の動きの中で変化するものであり，現在のいかなる民族であれ，民族を理解するためには，その歴史と社会の発展過程を切り離すことは決してできないということである。民族の現状の調査は必ず歴史研究と結び付けて行われるべきである。学問分野について言うと，それは社会学ないし人類学と歴史学とが結合することにほかならない。私の見るところ，このことは私個人のみの理解ではなく，現在民族研究に従事する学者と指導者の間では共通の認識である。

1956年，第一期全国人民代表大会常務委員会で，科学研究隊を組織し，中国の各少数民族に対して全面的な社会歴史調査を行うことが決定された。この調査研究に関わった人員は総計1700人を越えた。関係者たちは別々に，異なる地域の少数民族のもとでフィールド・ワークを行い，またグループに分かれて何度も研究討論を繰り返した。それは1957年に始まり，1960年代中期に一段落を告げたが，終了したのは改革開放の初期の1991年のことである。調査の結果は国家民族事務委員会から「五種叢書」として出版された。総合的な概況を紹介したもの一冊のほかに，少数民族の民族誌・歴史・言語の専刊とフィールド・ワークのデータを編集したものを含み，合わせて計403冊，8千万字にものぼった。この大規模な民族研究工作は三十年余りもの歳月を要した。文化大革命に妨害されて十数年研究は停滞したが，その成果から見ると，わが国の民族研究の空前の大事業と言えるであろう。

この中国少数民族社会歴史調査には，私は初めの一時期参加しただけであった。準備と組織の段階，および開始されたときに責任者としてそれらを担当し，雲南省でのフィールド・ワークを行った。1957年に北京に呼び戻されてから私は，程無く政治的な反右派闘争の拡大の影響を受け，社会調査工作を停止させられた。1966年に始まった文化大革命の時期には，私の正常な社会生活はあらゆる面で衝撃を受け，1980年になって初めて公的に私の政治的な地位が正され，正常な社会生活を回復した。このときから私は学術上，第二の生命を獲得し，現在まですでに16年経っている。もし1935年の瑤族の調査を私の学術的生命の始まりとするならば，研究生活は現在までにすでに60年を越えているが，そのうち政治的な理由で23年を失ったので，真に学術研究に時間を費やしたのは今までのところ三十数年ということになる。私は第二の生命において，一日を二日分使おう，失った時間を取り戻そうと全力を尽くした。この願望は今ももちろん堅持しているが，実現できるかどうかは天命次第である。

私が学術研究の上で第二の生命を獲得したときは，中国はまさに改革開放の時期に突入しつつあった。国民経済は目覚ましく発展し，社会の各方面において非常に大き

な変化が生じつつあった。最高の時期を迎え，私の学術研究の上にも新たな方向性が生まれた。はじめは私はこの第二の生命を民族研究を続けることに使おうと考えていた。しかし1981年にハックスリー賞を受けるためにロンドンへ行こうとしていたときに，師のレイモンド・ファース教授の意見により，この機会を利用してロンドンの校友たちに故郷の農村の解放後の状況について報告する準備をした。このため，私は再び故郷の農村に帰り，そこに短期間滞在したが，そのときの訪問において私は，当時の農村の発展に対する熱気の刺激をひしひしと感じ，この歴史的な大きな転換の潮流に追随しようと決心した。私は研究の重点を農村コミュニティ研究へと移し，そしてその研究が深まり小城鎮研究へと至った。最近ではさらに一歩進んで，経済区域の形成と中核都市の勃興に対して研究の興味が生まれてきた。このため，ここ十数年ほどは民族研究の方面におけるウエイトが減りぎみであったが，しかし民族研究に対するもとからの情熱は衰えずに心のなかにとどまり続けた。それゆえ，機会があれば今でもしばしば少数民族地区を訪れて，昔からの友人に会っているのである。

私が中国少数民族社会歴史調査に参加したとき，研究の待たれるであろう一系列の問題を心の中に抱いていた。こうした問題はずっと心のなかにとどまっており，1957年以降はフィールド・ワークの中で回答を見つけ出す機会もなかったが，私の思考から消え去ってしまったわけではなかった。私を困惑させた主要な問題は，少数民族の社会・歴史の発展に対して漢族がどのような作用を果たしたのかということと，漢族と国内のすべての少数民族を内包する「中華民族」をどのようにとり扱うのかということとであった。

私が民族研究に参加した当時は，民族工作というとそれは少数民族に関する実務的な仕事を意味していた。このため，ごく自然に，民族研究もまた少数民族研究と同じものであって，漢族研究は含まれていなかった。回想するに，この言わずもがなの見方は，中央訪問団の時期にすでに形成されていた。中央訪問団の実際の任務は，少数民族に対して，新中国において彼らには主役となる権利があること，つまり民族平等の政策を宣伝することであった。このため訪問団は少数民族のみを訪問し，漢族を訪問することはなかった。こうした任務は工作の段取りをも決定し，一つ一つの少数民族を対象として別々に訪問することになった。私たちが少数民族社会歴史調査を組織したときにも同様の段取りをした。最後には一つの少数民族を一単位として各民族の歴史を編集した。55の少数民族にそれぞれ一冊ずつ簡史があり，合わせて55冊である。初めはこうした形式もなかなかに道理に適ったものと思っていたが，深く考えていくうちに，このように民族ごとに歴史を編纂するという形式にはもちろん長所と利点と

があるものの，先に述べたような困惑をも私の中に生み出したのである。

私の困惑は中国の特徴，つまり実際には少数民族は漢族と切り離すことはできないということから生じたものである。漢族と切り離すと，いかなる少数民族を中心としてその歴史を編集したとしても，それは完全なものになるのは非常に難しい。私を困惑させたこの問題は，「民族簡史」を編集するときに執筆者にとっての難題ともなった。このため，1960年代初期に多くの学者が「民族間関係」の研究を重視しなければならないと提唱した。「民族間関係」を重視するということは当然，ある民族と他の民族との接触と影響を総合的に指して言うことなのであるが，わが国の少数民族について言うならば，主には漢族との関係を指している。この提唱は歴史研究が一つ一つの民族のみを単位として取り掛かるべきではないということを反映している。民族間関係を重視することは，もとよりその当時の各民族の歴史を編纂していたときには有益な提唱であった。しかし各民族に分割して書くことの欠点を補ったとしても，それでも私の思想上の困惑は決して解決されなかったのである。

私は歴史学を専門とする者ではないが，しかし，かつての漢族を中心とする観点で書かれた中国の歴史に対しては，ずっと反感を抱いていた。どのようにしたらこうした観点を飛び越えて中国の歴史を書くことができるのであろうか。この問題について述べると，私が中央訪問団から帰ってきて，中央民族学院の設立準備事業に携わっていたとき，すでに自覚し考えるところがあった。当時私は歴史学者や言語学者・民族学者たちを中央民族学院に招いて教鞭を執らせ，民族研究を推し進めるべきであると提案した。この提案は指導部の同意を得ることができたのみならず，確実にその方向へと歩み出した。さらに，程無く私はカリキュラムの中に総合的に各民族の歴史を教える基礎科目を設けるべきであると提案した。しかし歴史学の専門家たちの多くはこの科目を教授する準備がなく，民族の視点から系統的に中国通史を論じた人も過去には全くおらず，講義を担当したいと願う人を見つけることができなかった。結局，私は仕方なく自分で教壇に上り講義をしてみることになった。この科目は一学期のみ講義し，教材を一冊書いただけで，最後にはその難しさを認めて退かねばならず，続けて講義することはなかった。この教材は外部には伝わっておらず，未使用のままの状態にしていた。ために，文革の時期もずっと手元にとどめることができた。

1989年の夏，私は威海市に夏の休暇に行った。当時すでに80歳に近づいていた。民族研究に対する心残りから，かねてより懸案であった問題が再び心の中に沸き上がってきた。私は幸運にも残っていたこの講義教材を携えて，一個月間の休暇を利用し，更めてこの二十年余りの間の思考と講義教材とを結び付けて整理し論文にしようと考

えていた。このとき私はまさに Tanner 講演の約束を受けて，香港の中文大学に赴き学術講演を行うことになっていた。私はこの整理した論文を講演の原稿とするつもりであった。この論文の題目が「中華民族的多元一体格局」である [費　1989]。この論文の中で長年鬱積してきた民族研究上の困惑から僅かながら抜け出し，さらに続けて探求するに値する観点を提出した。

この講演の主な論点の第一は次の点である。中華民族は中国の境内の56の民族を包括する民族実体であり，決して56の民族を合わせた総称ではない。というのも，この計56の民族はすでに結び付いて相互に依存するものとなっており，一つに合わさっていて分割することのできない統一体であるからである。この民族実体において，それに帰属するすべての成分［構成要素となる民族集団］は，すでに層次がより高い民族的アイデンティティ，すなわち利害を共にし，存亡を共にし，栄辱を共にし，命運を共にするという感情と道義を有している。この論点は私が民族アイデンティティの多層次論へと発展させた。多元一体格局の中では，56の民族は基層であり，中華民族は高層次なのである。

第二の論点は次の点である。多元一体格局が形成されるには，分散的な多元が結合して一体を形成して行く過程があり，この過程において凝集作用を果たす核心の存在が必要であった。漢族は多元的な基層のうちの一つであるが，彼らこそが凝集作用を発揮し，多元を一体へと結合させたのである。この一体はもはや漢族ではなく，中華民族であり，高い層次のアイデンティティを持つ民族なのである。

第三の論点は次の点である。高層次のアイデンティティが必ずしも低層次のアイデンティティにとって代わったり，あるいはそれを排斥したりするものではない。異なる層次は衝突せずに両立して存在することができるし，さらに，異なる層次のアイデンティティの基礎の上にそれぞれがもともと持っていた特徴を発展させ，多言語・多文化の統一体を形成することもできる。よって高層次の民族は，実質的には一体であり多元的でもある複合体である。その間には相い対立する内部矛盾，すなわち差異の一致という矛盾が存在しているが，その消長や変化によって，絶え間なく変動する内外の条件に適応し，その共同体自身の存続と発展を可能にするのである。

この三つの論点は，私が中国の民族の現状と歴史を研究する実践の中から得たものである。長年にわたる探求と思索を経て獲得したいささかの，全面的とは言えない理解とも言うことができる。この理解においては中華民族・漢族・少数民族はそれぞれの適所を得て，それぞれが層次の異なるアイデンティティを持つ集団に属している。私たちは言葉の上ではどれも民族という同一名詞を用いているが，しかしそれらは層

次の異なる実体を指しているのである。漢族と55の少数民族は，ともに同じ層次に属しており，それらが互いに結合して中華民族となるのである。中華民族とは，56の民族という多元が形成した一体であり，層次がより高いアイデンティティを持つ民族実体なのである。もし，多元一体格局を持つ中華民族の形成過程を事実に基づいて明らかにするならば，それこそが民族の観点から描いた中国通史となるであろう。それはまた，私が民族研究の領域において夢見て久しかった，そしていまだに完成させる能力のない目標であると言うこともできる。

五

一人の人間の思想や観念は，現実と接触するうちに練られて形成されてくるもので，理論は実践と切り離すことができないと私はいつも考えている。私の論文「多元一体格局」の土台は，1935年に広西の大瑤山で行ったフィールド・ワークにまで遡ることができるのである。同時に私は，実践だけでは十分とは言えず，既製の理論の中から啓発と導引を得る必要があると考えている。大瑤山での実践において，私は民族的アイデンティティの層次を見ることができ，さらにそれを中華民族の形成と関係づけた。その間にはもとより実践が重要であったが，それだけでなく，私の脳裏にとどまり続けたシロコゴロフ先生の ethnos 論がその促進剤となったと言うべきであろう。

先に民族の言語について述べたときに，1935年に大瑤山の瑤人の中に異なる言語を話す集団がいるのを見たことを提起した。すなわち瑤語を話す盤瑤（自称は勉）・苗語を話す花藍瑤（自称は炯奈）・侗語を話す茶山瑤（自称は拉加）である。1978年，瑤山を再び訪れたとき，『瑤族簡史』の記述とそのときの私の聞き取りとが結びついて，この地域の瑤族の歴史に対して基本的な理解を得ることができた。14世紀以前には，瑤族の祖先はすでに南嶺山脈一帯で生活していたようである。漢文で記された資料によると，この地域の民族闘争は明代において激化した。15世紀の末に至り，明朝が軍を動員し当地の土着民族に対して戦争を仕掛けたが，それが現在の金秀瑤山付近の大藤峡一帯で起こった有名な戦争である。この地域の土着民族は主に瑤族であり，彼らはここから追われて山岳地帯へと入り，「山がなければ瑤に成らず」という局面を形成した。1930年代に私が調査した花藍瑤は現在の金秀瑤山，当時は大瑤山と称されたところにいた。金秀瑤山の現在の瑤族居住民は異なった時期に山外から移住してきたものである。このような異なった地域からこの瑤山に移住してきた人々は，皆な山外には居られなくなった土着民族で，この多くの人々は瑤山に移住してからは険阻

な山岳に拠って生存してきたのである。彼らは生存していくために団結せざるを得ず，遵守すべき共通の秩序を作り上げた。それが解放まで維持された石牌組織である。対内的な平和的協力関係と対外的な敵愾心の保持が，一体を作り上げた。山外の人は彼らを瑤人と呼び，彼ら自身も自ら瑤人と称していて，民族的アイデンティティを持った共同体をなしていた。そして，このとき私の考えの中にも多元一体の雛形が作られたのである。

その後，私は各地の少数民族と接する機会が多くなり，それぞれの少数民族についての知識も幾分増えた。また漢族それ自体と結びつけて，多元から一体が形成される過程は民族という共同体が形成される普遍的な過程に非常に近いものであると考えるようになった。さらに一歩踏み込んで，私たちが現在アイデンティファイしている「中華民族」についてみてもそれは決して例外ではない。ここにおいて前章で提起した民族研究における困惑を解決する構想が，私の思考の中で次第に形成されてきたのである。1950年代初めに，私が中央民族学院で民族史概論を講義しようと試みたとき，この初歩的に形成された構想を使って試作的な講義教材を書いたのである。1989年には「中華民族的多元一体格局」と題する Tanner 講演の原稿を書き上げた。この論文は私の思想上の一つの探求であり，繰り返し論証する価値のある初歩的な理論的見解を提出したのであるが，いまだ成熟した段階に到達しているとは言えない。

1990年に国家民族事務委員会が学術討論会を開き，私のこの論文について議論を行った。多くの学者や専門家がそれぞれの研究成果をもとに，他の少数民族の歴史資料を用いて，多元一体という格局を証明した。全員が共通して，これが新たな観点であり，新たな体系であり，新たな探求であると認めたのである。この討論会で発表された論文は『中華民族研究新探索』として1991年に出版された [費　1991]。

私の講演での論文を読み返してみると，理論上さらに論証する価値があると考えられるのは，民族的アイデンティティをもって民族という人々の共同体の主要な特徴であると見なし，さらに一歩進めて民族的アイデンティティの多層次性にまで発展させることである。私自身のこの構想の根源に遡るときに，まず思い起こしたのは初めて社会学を学んだときに修得した we-group 或いは in-group という概念である。W. G. Sumner は名著 Forkways において，人間の行為規範には二重性が存在することを指摘している [Sumner　1907]。つまり，自己の所属する集団の内部に対する共感と外界の集団に対する疑いと敵意である。それはまた，中国のふるい言い伝えにある「我が族類にあらざれば，その心必ず異ならん」という先入観を持つことである。Sumner は前者を in-group と呼び，後者を out-group と呼んだ。つまり集団に内と外

の区別があるのである。後に we-group という言葉を用いて in-group を呼ぶ人が現れたが，その意味は in-group に所属している人は全て互いに自家人であると認識しているということであり，「私たち」というアイデンティファイするための言葉を用いて呼ぶことである。よってこれはアイデンティティ集団であると言うことができる。私は民族とは we-group もしくは in-group の類に属するものであると考えている。それゆえに私は民族的アイデンティティをもって民族という集団の心理的特徴とするのである。

また私は，初めて人類学を学んだときにシロコゴロフ先生の *Ethnos* という題の小冊子 [SHIROKOGOROFF 1934] を読んだことを思い出した。それはまだ1934年のことである。後にシロコゴロフ先生はこの小冊子を大著 *Psycho-mental Complex of the Tungus* [SHIROKOGOROFF 1935] の中の一章に組み入れた。

Ethnos というラテン語は非常に訳しにくく，私たちの言うところの民族と密接な関係があるものの，そのまま民族と訳してしまうといくぶん問題があるようである。特にシロコゴロフ先生の理論の中では，ethnos は非常に豊富な意味を含んでいる。Ethnos はシロコゴロフ先生の考えにおいては，ethnic unit を形成する過程である。Ethnic unit は人々が集団を組織し作り出す単位であり，その成員は似通った文化を持ち，同一の言語を話し，同一の祖先から生まれてきているのだと信じ，心理的には一つの集団に属しているという意識を持ち，しかも内婚を行っている。この定義からすると ethnic unit は私たちの言うところの「民族」に相当すると言うこともできるであろう。しかし，ethnos とは民族を形成する過程であり，一つ一つの民族はこの歴史的過程がある特定の時空間において姿を現わした一種の人々の共同体にすぎない。シロコゴロフ先生が研究した対象はこの過程そのものであり，私はいまだに最適な中国語の訳語を見つけだしていない。

Ethnos は民族を形成する過程であり，それは私が「多元一体」の動態から，中国の大地における数千年来の，幾世代にもわたる人々の集合と分散がそれぞれの民族の歴史を形成してきたことを理解しようとしたこと，まさにこのことであるとも言える。私がこの論文の中で書いたことが，シロコゴロフ先生の私を啓発したこの訳し難い言葉 ethnos であると言えるであろうか。

シロコゴロフ先生の ethnos 論と関係づけて私のこの「多元一体論」を見ると，私という学生が先生の理論をいまだに学び終えていないことが分かるのである。私はただ中国の境内の諸民族が歴史において分合するところに着目しただけであり，通時的な変化の輪郭を大まかに描いた，簡単な，その意図を示すだけの見取り図にすぎない。

決してシロコゴロフ先生が ethnos 理論の中で指摘したような，分合する歴史的過程においてそれぞれの民族単位がいかに分かれいかに合し，そしてなぜに分かれなぜに合したのかという道理にまで深く立ち入って検討したわけではない。今，シロコゴロフ先生の著作を読み返してみると，このことは，先生が ethnos 論の中で提起している，民族単位において常に作用し続けてきた凝集力と遠心力の概念について，私がしっかりと把握していなかったことによるものであると悟るのである。さらに民族単位の間で互いに衝突し合う場面において発生し，引き起こされる民族単位そのものの変化にも注意を払ってはいなかった。こうした変化は事実上，民族の盛衰存亡と分裂融合の歴史を表現しているのである。

私の民族研究の経歴を回顧するに，もう三十年以上も少数民族の中に深く入りこんだフィールド・ワークに基づく研究を行っていない。先に提起したような諸問題は，今生では私が自ら行って研究することはできそうにもない。それゆえ，ただ若い世代のなかで私のこの方面での探求を受け継いで続行することを願う人々が出てくることを望むだけである。私が北京大学の社会学人類学研究所に，民族の凝集力という問題を彼らの今後の研究課題の中に加えることを提案したのは，まさしくこのためなのである。

文　　献

費　孝通
1989 「中華民族的多元一体格局」『北京大学学報』（哲学社会科学版）1989(4): 1-19（費孝通等　1989 『中華民族多元一体格局』北京：中央民族学院出版社に再録）。
1991 「中華民族研究新探索」費孝通編『中華民族研究新探索』北京：中央民族学院出版社，pp. 1-10。

FEI, Hsiaotung
1939 *Peasant Life in China*. London: Kegan Paul Trench, Trubner & Co., Ltd.

SHIROKOGOROFF, S. M.
1934 *Ethnos*. Beijing: Qinghua University.
1935 *Psycho-mental Complex of the Tungus*. London: Kegan Paul Trench, Trubner & Co., Ltd.

SUMNER, W. G.
1907 *Folkways*. Boston: Ginn.